随 想

楕円球との出会い

小澤　政弘＊
Ozawa Masahiro

学生時代は中学校でのバスケットボール以降、クラブ活動は団体スポーツの球技を行っていた。特に、高校ではラグビー、大学ではアメリカンフットボールという楕円球を使うスポーツをクラブ活動で行っていた。IHI に入社して 30 年以上、IIC ではようやく 1 年が経過するが、10 年以上にわたるクラブ活動を通じて得たことが会社生活でもベースとなっていると思い、振り返ってみたい。

楕円球との出会いは高校一年の春であった。高校でもスポーツをやろうと考え、中学校時代の友人といくつかのスポーツクラブの練習に参加して検討していた。そんなある日、グラウンドで各クラブの練習を見ていた折、ラグビー部の先輩から「一度練習に参加してみないか。」と誘われた。それまではラグビーというスポーツをほとんど知らなかったが、友人と練習に参加した。楕円球のボールを使ってのパス、キックなど広いグラウンド一杯に走り回り、へとへとになった。しかし、充実感と、初めて触れた楕円球の取り扱いの難しさと面白さから、ラグビー部に入ることとした。

最初の頃は、練習でのラン･パスについていけなかったこと、転がった楕円球の動きに戸惑ったこと、思うところに楕円球をキックするにはどうするか、自分よりはるかに大きな相手をどのようにタックルするか、などが思い出である。

一年生の最初の試合では、センターバックとして出場し、途中で一年生の仲間と交代する予定であったが、二年生の先輩が怪我で退場して、フル出場したことを覚えている。ポジションは、一年生時代は主にフルバック、二年生以降は主にセンターバックであった。一年生の終わりの頃と思うが、東京都代表の内の一校として何とか関東大会に出場し、初めての芝生のグランドで試合をして勝利した。高校三年間でバックスのポジションはすべて経験したが、なかなかトライができず、三年生の最終戦でのトライが初トライとなった。

ラグビーは「楽苦美」と表すことがあると思うが、その言葉通りのスポーツであり、試合後の「ノーサイド」という言葉にも団体競技の心が表れていると思う。ラグビーはチームワークが重要であり、「All for One、One for All」という言葉は、私の好きな言葉の一つとなっている。チームが一段となって一つの目標に向かって行動するとき、常に頭に浮かぶ言葉であり、社会人になっても大切な行動指針の一つである。

大学でもスポーツクラブに入ろうと考えていた。OB として高校のラグビー部に練習を見に行った際、高校のタッチフットボール部（当時、高校ではタッチフットボールであった。）の先輩が、私の入った大学でアメリカンフットボール部を作る予定と聞いた。また、大学で偶然中学のバスケットボール部の先輩に会った。その先輩はアメリカンフットボール部の創部発起人の一人であり、私が高校でラグビーを行っていたので、是非アメリカンフットボール部に入るようにとの誘いを受け、アメリカンフットボール部に入ることにした。

創部間もない時期では、防具は無く、ヘルメット、スパイクとボールだけの練習が続いた。タッチフットボールの経験者は多かったが、皆タックルは経験が無く、チーム内でのタックルのコーチは私であった。最初の試合は人数がそろわず、他大学のチームとの合同チーム

＊　取締役　計測事業部長

で試合をした。私のポジションは、オフェンスではランニングバックでパスレシーバでもあり、ディフェンスではディフェンスバック、また、キッカーでもあり、部員が少ないため常にフル出場という状況であった。クォータバックが授業の関係で試合に出場できないことがあり、一試合だけではあるが私がクォータバックを行ったことも良き思い出の一つである。ラグビーでは最終戦でようやくトライできた私であるが、アメリカンフットボールでは最初の試合でタッチダウンをすることができ、自信が付いたためか、チームのポイントゲッターにもなれた。我々のチームは高校時代にタッチフットボールを経験したメンバーがおり、まだリーグ加盟はしていなかったが、そこそこの勝率を上げることができた。

アメリカンフットボールはラグビーと似た楕円球を使用するが、ラグビーボールよりも先端がとがっており、転がったときの対応はさらに難しくなるが、パスの場合は使いやすいボールである。キックの場合はボールの形を利用して、その時々の状況でキックの仕方を工夫することができる。

また、ボールは楕円球で似ているが、試合の仕方はラグビーと異なり、どちらかというと野球に近く、野球が 3 ダウンに対し、アメリカンフットボールは 4 ダウンが攻守の分かれ目である。4th ダウンまでに 10 ヤード獲得すると、再度 1st ダウンとなり攻撃権が継続する。4 th ダウンまでに 10 ヤード獲得できない場合は攻守が交代するので、3 rd ダウンまでの攻防が重要となる。このため各チームは、パスプレー、ランプレーで多くのサインプレーを決めており、ダウン数、グラウンドポジションなどから次のプレーを選択している。どのようなプレーを選択するか、相手の出方を読んで対応していく頭脳プレーとしての面白さもある。各ダウンの攻撃は、短いものでは 1 秒もかからず、ダウン毎にプレーが中断されるので、観戦する人にとってはサッカーやラグビーに比べて連続性がない印象をもたれることが多いが、ルールを知って試合を観戦することで面白さは倍増する。

写真 1　思い出のワンシーン

アメリカンフットボールでは、プレー毎に各ポジションの役割が決まっている。一人でもその役割を失敗すると、そのプレーは失敗となってしまうことが多い。各プレーの開始時は瞬間の勝負であり、相撲の立会に近いものがある。100 以上のプレーでの各自の動き、役割を覚え、その役割を果たすために練習に励んでチームとして完成させることに日々取り組んでいくこととなる。

ラグビー、アメリカンフットボールという楕円球を使用するといった点では似たスポーツであるが、試合の進行は異なる面がある。ラグビーは一人の動きを全員でフォローすることが重要であり、チームメイトをよく知り、その行動をバックアップするようにプレーすることが大切となる。一方、アメリカンフットボールはプレー毎の各自の役割が決まっており、その役割を確実にこなすことが大切となる。ともにチームワークが重要であり、常日頃の練習でそれを培っていくこととなる。

会社の業務も同様であり、IHI 在籍時代も、IIC に移ってからも関連部署と協力して対応することを心がけている。

取締役
計測事業部長
小澤 政弘
TEL. 045-791-3516
FAX. 045-791-3548